

## 「おろしや国酔夢譚」論

― 井上靖のモチーフと史料活用の方法 ―

高 木 伸 幸

### はじめに

井上靖の「おろしや国酔夢譚」は、昭和四十一年一月から四十二年十二月まで『文芸春秋』に連載され、四十三年五月、同じく『文芸春秋』に最終章が発表された。その後、大幅に加筆訂正され、四十三年十月、文芸春秋社より単行本として刊行された。十八世紀末のロシア漂流民大黒屋光太夫を主人公とする長篇歴史小説であり、第一回日本文学大賞を受けるなど、井上靖文学の中でも高い評価を与えられている。

この「おろしや国酔夢譚」には、様々な歴史文献が数多く引用されている上に、後述のごとく、井上靖自身が、歴史学者の協力の下で、この小説の執筆を進めたと説いている。

それだけに「おろしや国酔夢譚」は、連載完結直後から、「記録的、年代記的」作風と評されてきた<sup>1)</sup>。特に大岡昇平との〈蒼き狼〉

論争<sup>2)</sup>の影響を受けた、史実に忠実に書かれた小説と見做されてきた<sup>3)</sup>。しかし、この小説に史料がどのような形で活かされているのか、これまで適切な形で確かめられているとは必ずしも言えない。

そうした中、芦田栄子の「井上靖『おろしや国酔夢譚』論」(平成十七年三月『神女大國文』第十六号)は、小説と史料との関係を実証的に考察した唯一の論考である。芦田は「おろしや国酔夢譚」本文と様々な大黒屋光太夫関連史料を具体的に比較検証し、同作の「記録的性格」を認めつつも、井上靖のむしろ「創造性」を指摘している。例えば物語後半、ペテルブルグ郊外の「娼家」を舞台にした場面に関わる典拠との比較から、井上靖が「光太夫の性質として、人間の持つ厳しさや不屈の精神に焦点を置いた小説と捉えている。また物語の結末については、歴史学者・亀井高孝の影響を指摘し、光太夫に「流刑地」にあるごとき心境を抱かせようとする作家の「願望」を読み取っている。

この芦田の考察に対して、結論それ自体は大いに賛成できる。従って、本論は、モチーフ分析において、芦田論と一部重なっている。

しかし芦田の考察は史料の扱い、分析において、粗さが見られる。芦田は小説本文との比較にあたって、井上靖が直接、創作史料に用いた『北榎聞略』と、「おろしや国酔夢譚」連載から約四十年後に出版された山下恒夫編『江戸漂流記総集別巻・大黒屋光太夫史料集』全四巻（平成十五年一月～同年六月、日本評論社）を対等に扱っているが、もっと史料に軽重をつけた分析をすべきであろう。また『北榎聞略』のテキストとして、平成二年十月刊行の岩波文庫版を使用しているのも、実証の精度を高める上で不徹底であり、実際に小説と史料の関係で見逃している部分もある。さらに一部の史料の読み取りは不適切とも言える。<sup>4)</sup>

井上靖が「おろしや国酔夢譚」創作にあたって、実際に如何なる史料を用い、その中の記述をどのように活かしたのか、いま少し丁寧かつ正確な考察によって明らかにする必要がある。

本論は「おろしや国酔夢譚」における井上靖の史料活用の方法について、作家が直接参照した史料、主典拠である『北榎聞略』の昭和十二年版を主な対象として考察を進める。井上靖のモチーフ、特に主人公大黒屋光太夫の人物造形を明らかにすることに主眼を置く。

結論を少し記せば、井上靖は「おろしや国酔夢譚」創作にあたって、

『北榎聞略』に多くを依拠した、史料に原則忠実な姿勢を貫いている。その本文に限らず、校訂者・亀井高孝が記した「解説」までも作中に反映させている。しかしその一方で、同じ史料中の一部の記述には意図的に目を瞑っている。作中ではそれらを具体的に語らないことで、逆に自らのモチーフを強調する方法が取られているのである。同時にそうした記述については、完全に黙殺するのでなく、それとなく暗示的に記すことで、可能な限り史実を反映させようとする姿勢も見せている。

井上靖が参照した史料の中で、どれが取り上げられ、どの部分が割愛されているかを明確化することで、この小説における作家のモチーフと創作方法をより正確に把握できよう。

以下、「おろしや国酔夢譚」について、その本文と典拠とを比較しながら考察を進めたい。

## 一

天明二年（一七八二年）十二月、船頭の大黒屋光太夫以下十七名を乗せ、伊勢白子の浦を発った神昌丸は、間もなく大しけに遭い、八ヵ月間漂流。辿り着いたアムチトカ島で四年間を過ごした後、ロシアに渡るが、寒さの影響等で仲間を次々と喪っていく。光太夫は日本への帰国の望みを失わず抱き続け、やがて女帝エカチリーナ二世へ謁見を許され、帰国を認められる。約十年に及ぶ異国での生

活を経て、帰国船に乗れたのは光太夫、小市、磯吉の三名のみ。うち小市は北海道根室で死亡。無事江戸へ辿り着いたのは光太夫と磯吉だけであった。しかし、光太夫と磯吉は、帰国後の後半生を半幽囚の身で過ごすこととなった。

右のごとき「おろしや国酔夢譚」の創作にあたって、井上靖は初刊本の「あとがき」その他で『北槎聞略』を主典拠に用いたと書いている。『北槎聞略』とは、江戸時代の蘭学者桂川甫周が、約十年に及んだロシア漂流について大黒屋光太夫と磯吉から聞き書きし、纏めた一冊である。「おろしや国酔夢譚」連載開始以前では、歴史学者・亀井高孝の校訂による活字翻刻版が、昭和十二年十二月に三秀舎から、四十年五月には吉川弘文館から刊行されている。井上靖はこれらのうち、前者の昭和十二年版を主として参考に用い、同書の校訂者・亀井高孝を初めとする複数の歴史学者から様々な教示と史料提供も受けていた。<sup>(5)</sup>

『北槎聞略』は、巻之一「船号同夥人名」にて、神昌丸の乗組員十七名および光太夫ら三名を日本へ送還したロシア船の「護送使臣」等の人名をそれぞれ紹介。巻之二「飄海送還始末上」、巻之三「飄海送還始末下」にて、神昌丸の難船から光太夫、磯吉が江戸へ送り届けられるまで、約十年間の顛末を記している。巻之四より巻之十一まで、各巻ごとにロシアの地誌や風物、習慣、言語等の項目を分けて詳述している。

大まかに言えば、「おろしや国酔夢譚」は、物語の骨格をこの『北槎聞略』の特に巻之二、三に拠り、作中の随所に散りばめられたロシアの風物等は、巻之四以降を参照している。そのことを具体的に確認するために、これまで先行論でも典拠との関係が全く検証されていない場面、中でも物語序盤の主要舞台アムチトカ島での表現を例に挙げながら、小説と史料を対比させてみたい。

「おろしや国酔夢譚」第一章にて、神昌丸がアムチトカ島に漂着した翌日を描いた場面を見てみよう。早朝、光太夫が昨日下船した神昌丸へ目を遣ると、「船体がむざんに二つに割れて、船底のない船が磯の岩礁の間に打ち上げられて、横倒しになって」おり、米や衣類は「尽く波に持って行かれてしまった」。光太夫は昨夜を過ごした岩窟に引き返し、「心憂いので、見とうないわな」／＼と言って、そのまま臥して眼を閉じていた。<sup>(6)</sup> 続く本文を引用する。

暮方、岩窟の前の磯が騒がしくなったので、光太夫は初めて岩窟から出た。ニビジモフを初めとする異人たちが十人程が、破船の中にあつた酒一樽を取り出して来て、それを飲み、一人残らず酩酊している模様であつた。(中略) 土民たちが三三五五、それを遠まきにして見ている。そのうちに土民の男たち数人が異人を真似て酒樽を磯に運んで来た。そして彼等も亦、その樽にたかつて、小さい器でそれをすくって飲み出した。土民たちの運んで来たものも酒樽には違いなかつたが、中にはいって

るものは酒ではなく、船乗りたちが風浪烈しい日、舷に出て小用することができないので、そこで用を便じ、そのまま溜め置いたものであった。土民たちはさすがにうまくないと思つたのか、樽から離れ、専ら異人たちの騒ぎを見物する方に廻つた。／光太夫は荒磯の底抜けの狂態を見ているうちに、昼間すっかり失っていた或は生きられるかも知れないという気持が、極く自然に再び自分の心に立ち帰つて来るのを感じた。乾河道へ水が立ち帰つて来るような、それと見えるか見えぬかのゆるやかなみだし方で、生への希望が光太夫の心に立ち帰つて来たのである。

対して『北槎聞略』を見ると、巻之二に次のごとく記されている。井上靖が実際に参照した、昭和十二年版より引用する。以下、本論における『北槎聞略』引用は全て同書に拠る。

翌朝おき出て浜辺を見れば（中略）船は島のむかひ成暗礁にかた触て船底を打破り、上まはりのみ磯際にうちよせたる故、荷物は残りなく流れうせぬ。（中略）光太夫は心憂ければ眼を閉て見むきもやらず、其儘岩窟の中に入れて臥居たりしが、夕方になり何やら物さがしき故、密にさし覗き見れば、彼破船の内に酒一樽ありしを見出し「ビヂモフを初、磯辺に居ならびて酌かほし、何れも甚酔たる躰にて、心よげに舞うたふにてぞ有ける。島人等もこれを見て、うらやましくや思ひけん、破船の

うちをさがし索て、又一樽とり来り、鏡をうちぬき手々に汲て飲けるが、忽嘔噦して吐捨る。これは海上にて風浪烈しきおりは、舷に出て小解する事能はざる故、空樽にて用を便し溜置たるを、酒と心得のみたるなれば嘔吐せしは理りなりと、かゝる危難の内ながら、はらわたもちぎるるばかり可笑かりし（後略）

前者で語られている内容が、後者に忠実に倣っているのは明らかである。神昌丸の破船はもちろん、破船した神昌丸からロシア人たちが酒樽を見つけて酩酊し、それを見た土民（島人）たちが小便を溜めた酒樽を間違えて飲み始めるなど、ユーモアを狙った創作かとおぼしき表現まで含めて、史料に基づいていたのである。井上靖は『北槎聞略』に原則拠ることで、そこから確認される史実の重さや、ユーモアをも含めた原典の趣を創作の土台とした。その上で、細やかな描写や具体的な説明を肉付けし、小説として仕上げているのである。特に右の場面では、神昌丸破船より「心憂い」気持ちに落ち込んでいた光太夫が、浜辺の異人たちの狂態を見て、「生への希望」を取り戻していく、その心境の変化が描き込まれていることに注意したい。『北槎聞略』巻之二においても、光太夫の「心憂い」気持ちとは認められるが、小便用の樽を酒樽と間違えた島人たちに対する光太夫の心境は「可笑かりし」と記されるのみである。

つまり井上靖は、「可笑かりし」の五文字から、積極的に「生への希望」を汲み取ることで、光太夫の生に対する前向きな姿勢を浮

かび上がらせようとしているのである。

二

アムチトカ島を描いた場面について、いま少し詳しく史料との関係を確認つつ、この小説における光太夫像を把握してみたい。先の引用にも名前が挙げられていた「ニビジモフ（注、作中ニビジモフ）」をリーダーとする多くのロシア人たちがそこには登場する。彼等は海狸や海豹の毛皮買い付けのためにこの地に派遣されていた。彼らロシア人と光太夫の関わりを浮かび上がらせた、第二章中の一場面に目を向けてみよう。

ロシアへ渡る迎えの船が破船してしまったため、ニビジモフと光太夫は相談し、ロシア人と日本人で協力して船を建造することにした。船の完成が近づき、「祝宴の挨拶」として、「光太夫はロシア語で、日本人とロシア人とが力を併せて作ったので、日本とロシアの合の子の、今までついぞなかった頑丈な船ができ上がるに違いないというようなことを、ゆっくりとした口調で喋った」。その光太夫の姿を見た年長者の九右衛門の感想と、語り手のコメントが次のように記されている。

「船のできるのも嬉しいが、船頭の光太夫が堂々としていて、異人たちに指一本もささせねえのが、おらあ嬉しいんだ。（後略）」／九右衛門は泣きながら言った。確かに光太夫は堂々

としていた。ニビジモフこそ立てていたが、ニビジモフの部下たちに対しては、この日に限らず、光太夫はいつも自分を上位に置いていた。それも少しも背のびしている感じではなく、極く自然に振舞っての上のことだった。荒くれたロシア人たちが一歩おくものを、光太夫は生れながらにして身につけていたのである。

『北槎聞略』巻之二には迎えのロシア船が破船した故に、ロシア人と日本人が協力して船を建造したとの記述が確かに認められる。<sup>6</sup>その史料に基づいた場面設定に加えて、井上靖はロシア人に臆せぬ堂々たる日本人のリーダーとして光太夫を描き上げているのである。

旅行家・探検家のジャン・パプティスト・レセップスは『レセップス旅行日録』（二七九〇年）の中で、ニジネカムチャックで出会った日本の漂流民、特に光太夫に対する感想を記している。亀井高孝は昭和十二年版『北槎聞略』「解説」の中で、そのレセップスによる光太夫評を約三二〇〇字の日本語訳で紹介している。昭和四十年版の「解説」にもレセップスの光太夫評は見られるが、約八〇〇字に簡略化されている。対して「おろしや国酔夢譚」を見ると、物語の後半で、昭和十二年版「解説」中のそれが、最後の部分だけ除いた約二五〇〇字の文章として、平易なわかりやすい文体に改められながら、ほぼ同じ文意のまま引用されている。<sup>7</sup>そこにおいて光太夫は、他の日本人から「親愛の情と特別の敬意を払」われている上に、

「長官の家であろうとその他の人の家であろうと、気楽に出入りし」「自然にふるま」っていること、いわば誰にも気後れせぬ人物だと説明されている。

井上靖はやはり昭和十二年版『北様聞略』を参照し、その「解説」にも目を通し、かつ亀井高孝から説明を受けていたことが確認できよう。そしてアムチトカ島においてロシア人に臆せず堂々と振舞う光太夫の姿は、このレセップスの感想に一つの手掛かりがあり、そこから膨らませた表現だとひとまず推察できるのである。

しかし、その上で、作中における光太夫像は、井上靖のモチーフを反映し、意図的に方向づけられていると見るべきであろう。井上靖が参照した史料の中には、右のごとき光太夫像とはそぐわない記述もあり、それらは作中に取り入れられていないからである。

『北様聞略』巻之四には、実はアムチトカ島における光太夫らの見聞の一つとして、「ニビチモフ」を中心とする次のような事件が、約七〇〇字を要して詳述されている。

「ニビチモフ」に怨恨を持つ島民四名が「ニビチモフ」殺害を企てたが、「ニビチモフ」はそのことを察知し、彼等四名を鉄砲で殺害した。それ以前、「ニビチモフ」は島の酋長の娘「オニインシ」を情婦としていたが、「テテツハノ」と「カチモフ」という二人に頼んで「オニインシ」を殺害させた。島民四名の殺害計画を「オニインシ」が父親に漏らしてはと危惧したからである。その「オニイ

ンシ」殺害の状況が、以下のごとく説明されている。

其時光太夫はオニインシと限隔ひと急おきて臥居たりしが、夜半過る頃、二人の者の忍び来りオニインシが床にのほる。光太夫ふと目さま、此光景を見、何事やらんと乍睡して、窺ひ居たるに、兩人やがて娘のうへにうちまたがり、一人は咽を扼り、一人は腹をつよくおしければ、只一声うんといひしのみにて音なし。や、ありて兩人はしのびやかに立さりけり。光太夫は心悸、肉慄、目も合す、被引かづき息をつめて居たるに、曉近くなりて小市入来り、屍を床より引おろし表の方に持行ける。後にきけば二人の者に頼れ若いなまば身のうへもあやふからんと、ぜひなぐうけひきて、密に死骸を山陰に負ひ行、埋み隠せし由なり。此事ニビチモフ婦国のうへ露頭に及び、ニビチモフ、ステツパノ、カンダコフ三人をヲホツカ（注、作中オホーツク）にて獄に下され、光太夫等が婦国のころまでもなほ獄中にありし故、アミシヤツカ（注、作中アムチトカ島）にて救命の恩を蒙りたる者なれば、光太夫、小市、磯吉（注、作中磯吉）三人より、イルコツカ（注、作中イルクーツク）の有司まで赦免の願状を出したりしとぞ。

『北様聞略』から確認される「ニビチモフ」は、島民から命を狙われるほど恨みを買っている上に、自己保身のために情婦の殺害までする人物であった。光太夫は、その情婦殺害の現場に居合わせ、

息をひそめて震えていた。小市に至っては、遺体処理の手伝いをさせられていたのである。

この記述は、当時のアムチトカ島におけるロシア人と島民との関係に触れた史料と言えようが、作中には、その出来事を具体的に語った本文は認められない。たとえ史料として重要であっても、小説のモチーフを表現する上で、むしろ取り上げるべきでない事件であったからに違いあるまい。

アムチトカ島におけるロシア人と島民との血腥い対立は、光太夫らの命を助け、ともに協力し合ったロシア人たちのイメージを貶める。併せて日本人の印象にもマイナスに作用する出来事と言える。特に情婦殺害の現場に居合わせ、「心悸こころおどろ 肉慄にくおそ 目も合あはず、被引ひきかづき息をつめて居たる」光太夫の姿は、堂々たる光太夫像を損なってしまう。遺体処理を手伝う小市についても同様のことが言える。井上靖がこの史料を取り上げなかったことから、作者の表現意図が逆説的に見えてこよう。

すなわち、井上靖は、物語序盤のアムチトカ島において、「生への希望」を失わぬ前向きさと、ロシア人にも臆せぬ堂々たる姿を光太夫のイメージとして強く打ち出す必要があった。十年の歳月を経て、光太夫が日本への帰国を実現する伏線として、光太夫の精神的強さをそこでは明確に表現しなければならなかったのである。

物語序盤の細部描写について補っておく。井上靖は、ニビジモフ

の人柄を評して、「格別悪い人間でもなさそうだった」と記す。光太夫と深く関わる人物として、読者に悪い印象を与えまいとしている。その一方で、「冷静で何を考えているか判らぬようなところ」や、「非情と言っくいらいの冷静さ」もニビジモフの人柄として書き込み、殺人者らしい雰囲気も与えている。さらにニビジモフらロシア人と島民との関係について、次のごとく描いている。

ロシアの毛皮買付人が島にはいり込んでいる以上、島人たちは彼等の願使に甘んじ、食うや食わずの生活を続けなければならなかったのである。／ニビジモフは、ふた言めには、昔は鬼のような買付人が乗り込んで来て、強制労働を強い、反抗的態度を示すと片っぱしから叩き殺したものだ、それに較べると、いまはおんの字だというように言っていたが、公正に見て、必ずしも「おんの字」とは言えなかった。島人の獲った海獺、海豹、胡狼の皮を無償では取り上げず、必ず代償物と交換してはいたが、交易とは名のみで、結局のところは、島民たちを搾れるだけ搾っていた。

殺人等の血腥い事件を具体的に記さない代わりに、ロシア人による島民への搾取に触れ、当時のアムチトカ島におけるロシア人と島民との関係の実際をそれとなく伝えようとしている。井上靖は史料を取捨選択し、自らのモチーフを強調していく一方、大きく取り上げられなかった史料も可能な限り反映させるべく、細部にこのよう

な暗示的表現を配置し、史実の枠組みを保とうとしているのである。なお『北様聞略』巻之四には、先の引用末尾に見ることく、殺人罪の発覚で獄に下された「ニビジモフ」について、光太夫らがイルクーツクの役人まで「赦免の願状を出した」とも記されている。これについても、具体的に語った本文は、作中に見られないが、その考察は後に回す。

### 三

アムチトカ島からロシアへ渡った光太夫は、「帰国に対する願いをますます固め」、「挫けてはならぬ」と自らに言い聞かせ、やがてロシア女帝との謁見に漕ぎ着ける。本文比較は略するが、『北様聞略』巻之二後半から巻之三の前半へ跨る部分に基づいた物語展開である。

物語の後半に入って、ロシア女帝との拜謁が叶った直後の時期、「ペテルブルグ郊外の娼家」を舞台とした場面がある。そこにおいては「ソフィヤが舞い、娼婦たちが唄った」。しかし、その作中歌に関わる設定として、「おろしや国酔夢譚」連載中に刊行された亀井高孝の著書に見る推測、「光太夫の悲恋」が全く取り入れられていない（『光太夫の悲恋―大黒屋光太夫の研究―』昭和四十二年三月、吉川弘文館。以下『光太夫の悲恋』参照）。また『北様聞略』巻之七に見られる、「娼婦」たちとの光太夫の艶福も、作中では目を

瞑られている。本論冒頭で挙げた芦田栄子の指摘にある通りである。

この「娼家」の場面において、さらに見逃してならないのは、光太夫が、帰国許可がなかなか下りないことから、「ベズボロドコ奴」「鬼のベズボロドコ奴」と反芻し、外務大臣ベズボロドコへの不信と恨みを募らせていることである。先行論では触れられていないが、亀井高孝がやはり『光太夫の悲恋』の中で紹介している史料、つまり光太夫の旧蔵本「絵本写宝袋」に残されていた書き込みが、そこには活かされている。同じ亀井高孝の著書の中から、井上靖は、ロマンの香りある光太夫の女性関係を取り入れられない一方で、ベズボロドコへの不信と恨みは作中に活かし、光太夫が耐え忍ばなければならぬ苦痛の大きさをむしろ拡大させているわけである。

先に検証した物語序盤での史料活用の方法と、この「娼家」の場面でのそれが、光太夫像の造形において、同じ方向を目指しているのは言うまでもあるまい。井上靖は光太夫を、強い意志を持って、困難を乗り越えていく、いわば「不屈の精神」の持主として描いているのである。

こういった光太夫像を踏まえつつ、さらに物語の終盤について検討したい。

光太夫は磯吉とともに、およそ十年ぶりに日本へ帰国を果たす。江戸へ送られ、御目付けの中川忠英、問宮信如の訊問を受けた。将軍臨席の「漂民御覧」の催し」にて、漂流とロシアでの見聞を語っ



た。その結果、二人には次のような措置が伝えられた。

——右之者共（光太夫、磯吉）外国へ漂流候処、年月難儀を凌ぎ、恙なく帰国仕り候事奇特なる志につき、金三十兩宛被下候。

一、此度別儀を以て在所へは相返さず、当地に差し置き、住所の儀は番長明地菓草植付の内に住居つかまつらせ、月々御手当として、光太夫へ金三十兩、磯吉へ金二十兩宛相渡可申候。

一、兩人共勝手次第妻をも呼び、安堵致し住居仕り候様致さるべく候。尤も植場手伝等申し付候儀は先ず見合せ、無役にて差置可被申候。

一、外国の様子、猥りに物語りなど致さざるよう仰せ渡され候趣、右の兩人へも可候申付候。且兩人領主へも何れもより可被相達候。身分の儀は、菓草植場に差し置き候もの同様に支配可致候。

この光太夫と磯吉に対する措置を伝える文面は、「神昌丸魯国漂流始末」の「雑録」（右井研堂校訂『漂流奇談全集』）へ明治三十三年七月、博文館〈収録〉および昭和十二年版『北槎聞略』「解説」に典拠とおぼしき記述があり、それらに基づくと判断できる。<sup>10)</sup>

ここで注意したいのは、右のごとき光太夫と磯吉への措置について、語り手は「半幽囚の生活を強いられたと捉えた上で、二人の「後半生は、前半生の烈しさに較べると、死んだようなものであったら

うと思われる」ともコメントしていることである。

確かに光太夫と磯吉は「番町明地菓草植付場」へ「かくまわれ」た上に「菓草植場の手伝いも許されず、ひとと自由に話すことも禁じられてしまった」。その意味では「半幽囚の生活」と言って差し支えない。しかし二人は初めに金三十兩を貰っただけでなく、以降は月々の「御手当」を支給されていた。金銭的不自由は全くなく、むしろ余裕ある生活を送ったとも推察できる。その点のみに注目すれば、光太夫と磯吉の後半生が「死んだようなもの」との見解は、果たして妥当かどうか、疑問に思う読者もいるのではないか。

こうした「おろしや国酔夢譚」における光太夫と磯吉の後半生への見解について、芦田栄子は、亀井高孝の『光太夫の悲恋』の一節を引用しつつ、亀井の解釈が井上靖に影響を与えたと捉えている。

亀井の『光太夫の悲恋』は、「おろしや国酔夢譚」の連載中、それも最終章が発表される前に刊行されていた。加えて亀井は「おろしや国酔夢譚」連載開始の約一年前に出版した『人物叢書・大黒屋光太夫』（昭和三十九年七月、吉川弘文館）で、光太夫と磯吉の帰国後の措置について、「兩人は菓園に一生お飼殺しにされてしまった。（中略）軟禁のうきめにあわせられた。（中略）いまさら一生つきまとった不運をなげいたことであろう」とも書いている。「おろしや国酔夢譚」は、こうした亀井の考察を、成程なぞった趣があり、芦田の指摘は適切と言える。

しかしこの「おろしや国酔夢譚」の、いわば結末は、亀井高孝の影響を受けつつも、それ以上に、井上靖の内なるモチーフの反映と言うべきである。

亀井高孝は『光太夫の悲恋』『人物叢書・大黒屋光太夫』の二作より約三十年前、昭和十二年版『北槎聞略』『解説』において、帰国後の光太夫と磯吉について、次のごとく書いていた。

彼等の葉園入りは、流言蜚語を極度に恐れる幕府として好奇心に富む人々の耳目から遠ざけんための体の良い監禁とも考へられる。彼らは終生をそこで送ったかどうかは寡聞にしてまだ之を明にしないが、少くも自由を束縛された代り生活の保障はえられたわけである。(中略) 帰朝からその没するまで三十五年余の長い余生については殆ど伝へられる所がないが、前半生の波瀾重畳の生活と正反対に無為安楽に過したのであらう。

亀井は右の引用の前半で、光太夫らが受けた措置を「監禁」と書き、いわば「幽囚の生活」と捉えているが、後半部分では傍線部に見るような見解を記していることに注目したい。亀井高孝も光太夫らが、ただ「半幽囚」の処遇に遭わされただけでなく、「生活の保障」はされ、その意味に限れば、それが幸福と言えるかは別にして、「無為安楽」の生活であったとの認識も、当初は持っていたのである。

井上靖は昭和十二年版『北槎聞略』を主要な典拠として用いており、先に述べたレセプスによる光太夫評の引用に見るごとく、同

書の「解説」をも参照していたのは確実である。同じ「解説」の、右の引用部についても、当然熟知していたはずである。

つまり井上靖は、光太夫と磯吉が金銭的な豊かさを得られた史実を十分把握しつつも、そこには反応しなかった。「ニビチモフ」による殺人現場に居合わせた光太夫の姿に目を瞑って、堂々たる光太夫像を強調したのと同様である。彼らが自由を束縛された側面に強く惹かれ、その報われぬ運命を物語の結末として押し出したのである。

結果として、「おろしや国酔夢譚」は、光太夫の「不屈の精神」を描きつつ、その労苦が報われぬ、人生・運命の虚しさをも表した小説として完成した。井上靖の初期短篇歴史小説である「僧行賀の涙」(昭和二十九年三月『中央公論』)や「異域の人」(昭和二十八年七月『群像』)、それに初の本格的長篇歴史小説「天平の甕」(昭和三十二年三月〜八月『中央公論』)で表されたモチーフが、そこには発展的に継承されているのである。

ちなみに帰国後の光太夫と磯吉は、近年発掘された史料に拠れば、決して「半幽囚」のごとき生活でなく、もう少し自由を保障されていたらしい。従って「おろしや国酔夢譚」の結末部は、今日の目から見れば、史実からややみ出た形になっている。「おろしや国酔夢譚」より四十年近くを経て連載された吉村昭の長篇小説「大黒屋光太夫」(平成十三年十月一日〜十四年十月三十一日『毎日新聞(夕刊)』)は、そうした新史料に基づいて書かれている。本論は、井

上靖の創作意図を明らかにすることに主目的があり、執筆時に井上靖が目にするのができなかつた史料、史実との相違いについては、今後の課題として、別の機会に考察したい。しかし、「おろしや国酔夢譚」が、そして井上靖の描いた大黒屋光太夫像が、説得力ある鮮明なイメージによって読者に定着していたことを、新史料に拠つた小説の登場は逆に裏付けていよう。吉村昭は、井上靖の「おろしや国酔夢譚」を明らかに意識し、それを反射鏡として、同作とは異なる、新たな光太夫像の創造を狙つたと言ひ得るのである。

最後に物語の最終場面について触れておきたい。

光太夫と磯吉は、蘭学者による「陽暦一月一日の賀筵」(「芝蘭会」)に招かれた。その宴席において、光太夫はかつて出会つたロシアの思想家ラジシチェフ、つまりシベリアの「流刑地」に赴く途中だった人物に自らを重ねている。これまた芦田栄子の指摘にもあるように、「半幽囚の身」に置かれた光太夫の後半生について、「流刑者」のごとき心境にあつたと捉えているのである。本論では、それももちろんのこととして、さらに「芝蘭会」から「帰つた夜」の光太夫と磯吉に注目したい。光太夫が磯吉に次のように語っている。

「ニビジモフとはオホーツクへ着いた時、ろくに挨拶も交す暇なく別れたが、あの男はいまどうしているかな。(後略)」

本論前半で触れた通り、『北槎聞略』巻之四には、光太夫らが帰国を前にして、殺人者として獄にあつた「ニビジモフ」の「赦免しよめんの

願状ねがひがき」を出したと記されている。従つて、ニビジモフの現況を別れたきりで知らないという、この光太夫の台詞は、史料に忠実とは決して言えない。

しかし、井上靖はそれを十分承知しながら、敢えてこのように描いたと言えよう。この光太夫の台詞の後、二人のやりとりが次のように続けられている。

「ニビジモフなら、いまもオホーツクかヤクーツクあたりに居るんじゃないかな」

磯吉もふいに遠くを見るような眼をして言った。

「そうすると、二人ともシベリアだな」

光太夫はひとり言のような言い方をした。(中略)光太夫はラジシチェフとニビジモフのことを考えていたのである。そして暫くしてから、光太夫は言った。

「俺たちは、な、磯吉、いま、流刑地に居るんだ(後略)」

光太夫が磯吉に向けた最後の台詞により、後半生における彼らの境遇と心境を改めて流刑者に重ねている一方で、二人の会話を通して、ニビジモフはラジシチェフと同様、シベリアにあるだろうとの推測が為されていることに注意されたい。

作中において主要モチーフを損ないかねないニビジモフの殺人事件は直接語られておらず、そのためもあって、この結末部では、光太夫と磯吉に、ニビジモフの居場所をはっきり示させていない。し

かし、右のごとく、ニビジモフが「シベリア」にあること、つまり「流刑地」に居ることをそれとなく仄めかしているのである。『北様聞略』の中でも、語るのを避けたい出来事に対して、井上靖はかくのごとき表現によって暗示し、やはり史実の枠組みを保とうとしている。そして何より井上靖の頭の中には、後半生における光太夫の境遇が、ニビジモフと同様、シベリアの流刑者のごとく映っていたことは、この暗示的な表現から改めて確認されるのである。

### おわりに

井上靖は「おろしや国酔夢譚」の執筆において、『北様聞略』に大部分を抛り、その「解説」をも参照し、原則史料重視の姿勢を取りながらも、一部の記述には目を瞑ることで、自らのモチーフを強調した。結果として、「おろしや国酔夢譚」は、光太夫の〈不屈の精神〉を描きつつ、その労苦が報われぬ、人生・運命の虚しさをも表した小説として完成した。井上靖が繰り返し描いてきたモチーフが、そこには強く表れているのである。

井上靖はこれまで、大岡昇平との『蒼き狼』論争<sup>1</sup>以降、史実尊重の姿勢を強めたと言われてきた。そうした側面は確かに認められるが、この「おろしや国酔夢譚」においても、実際は自らのモチーフを優先させていたのである。

一方、「おろしや国酔夢譚」の細部には、十分に取り上げられなかつ

た史料に関して、史実を仄めかず、暗示的な表現がはめ込まれていた。それらは自らのモチーフと史料との間で整合性を保つべく、井上靖が考え出した一つの表現方法と言える。この時点で井上靖は大岡昇平の批判をまだ幾分か意識し、その苦心の跡が見えるかのようでもある。

かくて「おろしや国酔夢譚」は、概ね史実を尊重した「記録的、年代記的」作風である一方、それ以上に井上靖の内なるモチーフを強調しており、そのモチーフと史料との間で、むしろ前者を重視しながら、同時に細部描写でバランスを取った小説と言える。作家のモチーフと史料との関わりについて貴重な示唆を与える文字通りの労作として、井上靖の歴史小説の中でも重要な位置を占めているのである。

「おろしや国酔夢譚」から十年以上を経て、井上靖は「本覚坊遺文」(昭和五十六年一月〜八月『群像』)を書き、「孔子」(昭和六十二年六月〜平成元年五月『新潮』)を完成させた。これら二つの長篇歴史小説では、いわゆる「年代記的、記録的」作風でなく、語り手を設定し、作者の見解を前面に表出させたスタイルが取られている。井上靖はここに来て、〈蒼き狼』論争<sup>2</sup>の影響から完全に解放され、歴史小説においても、自らのモチーフを、より一層自由な方法で書き始めた<sup>3</sup>と推察されるが、それらの考察は後の機会に俟ちたい。

【注】

(1) 無署名「創造性豊かな漂流記―井上靖著『おろしや国酔夢譚』―」(昭和四十三年十一月二十六日『朝日新聞』、瀬沼茂樹「男性文学への志向―井上靖『おろしや国酔夢譚』―」(昭和四十三年十二月『群像』)、福田宏年「井上靖評伝覚」(初版昭和五十四年九月、増補版平成三年十月、集英社) 参照。

(2) 大岡昇平「蒼き狼」は歴史小説か「常識的文学論(1)」(成吉思汗の秘密―常識的文学論③)(昭和三十六年一月、三月『群像』)、井上靖「自作『蒼き狼』について―大岡氏の『常識的文学論』を読んで」(昭和三十六年二月『群像』) 参照。

(3) 曾根博義は「井上靖における《歴史》」(昭和六十一年五月『現代文研究シリーズ16井上靖』)で、「おろしや国酔夢譚」について、大岡昇平との「蒼き狼」論争以来、井上靖が取り組んできた「史実に従いながら人間の真実に迫る方法」によって、「最高の効果を發揮した」小説と論じている。

(4) 『北椏聞略』には、作中の「娼家」の場面の土台となった巻之七に「ソヒヤイノウナ」という氏名が確認され、巻之九においても、作中歌の元歌の作者である「プシが妹ソヒヤイノウナ」が登場する。芦田栄子は、これら(ソフィヤ・イワノウナ)の取り上げ方を論じている。すなわち井上靖は前者のみ作中に取り入れ、「光太夫と親しい仲であったとされる」若い未婚の「ソフィヤ」、つまり後者を意識的に削除したと論じている。しかし、『北椏聞略』の中で、「プシが妹ソヒヤイノウナ」が「若い未婚」だとはどこにも書いていない。巻之七と巻之九にそれぞれ見られる「ソヒヤイノウナ」は、同書の中で、同一人との記載が見られない代わりに、二人が別人だとも記されていない。亀井高孝の『光太夫の悲恋』(昭和四十二年三月、吉川弘文館)を見ると、二人のソフィヤが同一人の可能性が指摘されているくらいである。しかも亀井が同書で取

り上げている「悲恋」は、光太夫とソフィヤの関係ではない。光太夫が故郷に残してきたと推測される女性「おしま」とのそれである。実は芦田のこの考察は、五木寛之『ソフィアの歌』(平成六年六月、新潮社)を踏襲している。その五木の考察に、そもそも作家の想像が含まれていた。それをそのまま踏まえてしまうのは、やや不用意である。また芦田は「江戸漂流記総集別巻・大黒屋光太夫史料集第二巻」(平成十五年三月、日本評論社)収録の「寛政五年神昌丸二漂流民両目付吟味録」の中で、光太夫が「親ニハカクシヨビムカへ、故郷ヨリ一里半計リコレアリ候在所ニ、クラサセ置キ候」と発言していることについて、「親の反対を受け思ふ、悲恋の女性おしま」を語ったものと説明している。先述のごとく、この「おしま」とは、亀井高孝が『光太夫の悲恋』の中で推測した存在に過ぎない。それを別史料中の記述に、確定した史実のごとく当てはめてしまうのは、史料の読み取りにおいて、不適切である。しかし、その内実はともかく、「恋愛」を作中に取り入れず、物語からロマンチックな雰囲気を排除することで、井上靖が光太夫の意志の強さを強調したとの結論自体は適切と考える。

(5) 井上靖は初刊本『おろしや国酔夢譚』昭和四十三年十月、文芸春秋社の「あがきがき」で「この作品は基本資料として亀井高孝氏校訂の『北椏聞略』(昭和十二年刊)を使わせて戴きました」と書き、執筆の協力者として亀井高孝、加藤九祚、村山七郎、中村喜和、高野明らを挙げている。井上靖の旧蔵書を保管する神奈川近代文学館には、その井上靖文庫の中に『北椏聞略』昭和十二年版、四十年版どちらの書名も見られる。三重県鈴鹿市の大黒屋光太夫記念館第十二回特別展「井上靖『おろしや国酔夢譚』の世界」(平成二十七年十月二十四日〜十二月十三日)には、同文学館より「井上靖が使用した参考資料」として、それら二冊がともに出品された(同展図録(平成二十七年十月)参照)、『北椏聞略』十二年版

と四十年版において、本文自体はルビも含めて同一である。四十年版には、村山七郎による「大黒屋光太夫の言語学上の功績」が加わっている一方、亀井高孝の「解説」で十二年版に引用されていた史料が一部簡略化、削除されている。後述するように、十二年版「解説」は作中に反映された形跡がある。井上靖は十二年版、四十年版両方を参照しつつも、「あとがき」での記述にも見る通り、主に参考用に用いたのは十二年版と判断できる。

(6) 『北槎聞略』巻之二には、次のごとく記されている。「夫より三年といふ七月に、魯西亜の船来りけるが(中略) 風浪にて船纜をすり切、遂に破船しける。(中略) 其後にニビチモフ、光太夫等に云けるは、(中略) かく破船せしうへは兎も角もして船を造り(中略) いづれもも力を併せ給へと、魯西亜人の船員、光太夫等が船の古釘、又は此島にうちよする漂木共をとりあつめ、一年計にて、六百石程も積へき船をうち立(後略)」

(7) 昭和十二年版「解説」中のレセップスによる光太夫評の一部を挙げれば、次のようである。「しかしニジニにおいて最も私に関心を有たしめ、且つ沈黙に終るのを許さざらしめる事は、昨年の夏獺皮取引を目的とするロシアの船に便乗して、アレウト島から同地へ連れられて来た九人の日本人をそこで見出した事である。／これらの日本人の一人が私に語る処によると、彼は仲間とともにその国の船で出帆した。それは千島の最南端の島に赴いて同島人と同所商売せんためであつた。彼等は海岸に沿ひ少し遠ざかりつゝ、進んだが、忽ち恐るべき台風の一撃を蒙つて遠く沖合に流され全く方向を見失つてしまつた。(中略) 私に語つた当人は他の八人の上に著しい支配力を有してゐたらしく見える。(中略) 確実な事は、彼等が彼に対して特別な愛着と尊敬とを有つてゐた事である。(中略) 彼の名はコーダイユ (Kodai) である。(中略) 同国人に対する彼の身分上の優越は彼を一段上位に置くべきものであつた。けれども彼が奉られてゐたのは、疑ひもなく、その身分上の優越の為よりも、むしろ彼の敏捷活

発なる精神とそのやさしい性質との為であつた。彼はオルレヤンコフ少佐の家に逗留してゐた。司令官(オルレヤンコフ)の所であれ、他人の間であつたら、傲慢か少くとも不作法と非難されるであらう。礼儀に拘らずに、彼は直ぐ様意のまゝに寛ろぎ、且つどこでも見當つた席に着坐する。同時に欲しいものは何でも求めし、又はそれを己が手許に見つけたなら自身でそれを取る。(後略)。対して「おろしや国酔夢譚」に引用されたレセップスによる光太夫評の一部を挙げれば、次の通り。「ニジネカムチャックにおいて私が最も興味を抱き、したがって黙過し得ないことは、過ぐる夏アレウト列島からロシアの毛皮取引の船で送られてきた九人の日本人と出会つたことである。／そのうちの一人日本人が語つたところによると、彼とその仲間は、南千島の住民と貿易する目的をもつて、自国船で航海してゐた。彼らは海岸沿いに、陸地からあまり離れないように航行したが、台風のために沖へ流され、全く航路を見失つてしまつた。(中略) 私と語り合つた人物は、他の八人の同国人に比べて明白に優越感を保つてゐるように見えた。(中略) 部下たちが彼に、親愛の情と特別の敬意を払つてゐることは確かであつた。(中略) 彼の名はコーダイユと言つた。(中略) 同国人に対する彼の優越はいかにも明白であるが、併し彼はその生き生きした精神と温厚な性格によつて、これをひけらかすことをしなかつた。／彼はオルレヤンコフ少佐の家に住んでゐた。彼が長官の家であらうとその他の人の家であらうと、気楽に入入りしている様子を見ると、無遠慮、あるいは無作法と思われるほどであつた。彼は、すすめられる最良の椅子に遠慮なく腰をかけ、できるだけ自然にふるまひ、欲しいものを要求し、手の届くものは自分で取り上げた。(後略)」。無駄を省いた平易な文体に改められつつ、光太夫がどちらも「コーダイユ」と表記されるなど、両者の文意が対応しているのは明らかであらう。

なお「人物叢書・大黒屋光太夫」(昭和三十九年七月、吉川弘文館)にも、レセツプスによる光太夫評の日本語訳は引用されているが、約一四〇〇字と短く、作中の引用の半分程度である。従って昭和十二年版「解説」だけが、作中の引用部の全文をカバーしている。

(8) 『北槎聞略』巻之七に見る光太夫は、作中の場面の土台となった訪問の後も計三度「娼家」を訪れ、「娼婦」らから歓待されていた。こうした光太夫像が作中で語られていないのは、芦田栄子が既に指摘した通りである。

(9) 亀井高孝「光太夫の悲恋」では、光太夫の旧蔵本に残されていた書き込みについて検討している。亀井はまず光太夫の旧蔵本「源平曠軍配」に残されていた書き込みから、注(4)でも触れたごとく、光太夫は郷里の伊勢に「し満(注、おしま)」なる恋人が存していたと推測している。次いで、やはり光太夫の旧蔵本「絵本写宝袋」については、ロシア文字で日本語を書き留めたそれを取り上げている。日本文字でその一部を記せば、「国にて親に不幸いたしそる罰にそる」、「グラフベズボロドコ奴」  
「グラフベズボロドコ奴が鬼になって責めくさるわい」といった文言である。これらの書き込みが、「娼家」の場面における外務大臣ベズボロドコへの光太夫の不信、恨みとして活かされているのである。ちなみに「娼家」の場面の直後、なかなか帰国許可が下りない状況を鑑みて、光太夫はラックスマンに、次のように語っている。「日本では、自分たちのように、いろいろと容易ならぬ運命に弄ばれて、いっこうに自分の道の開けぬ者たちのことを、親不孝の罰が当たったと言う。自分の場合、まさしくその通りで、日本に居る時さんさん親不孝の罪を重ねたので、いまでもその酬いが来ているのである」。これまた「絵本写宝袋」の書き込みを手掛かりにした台詞であるのは間違いない。なお「源平曠軍配」は、「大本五巻五冊。都の富士作。宝暦六年(一七五六)正月、大阪吹田屋多四郎版」(『浮世

草子大辞典』平成二十九年十月、笠間書院)。「絵本写宝袋」は、橋守国作で、「享保五年(一七二〇)刊」(『日本古典文学大辞典第一巻』昭和五十八年十月、岩波書店)。

(10) 「神島丸魯国漂流始末」「雑録」、昭和十二年版『北槎聞略』「解説」に見られる光太夫、磯吉への措置を伝える文面は、ともに細かな表記の違いを除いて、ほぼ作中と対応している。しかし作中と「解説」では「此度別儀」の上に「一」があるのに対して、「雑録」にはそれが無い。また「雑録」では最後の条項として「二、御勘定奉行より、留守居を呼出し、左之通り御書付を以、被仰渡候」とあるが、「解説」では略され、作中も同じである。一方、月々の「御手当」について、「雑録」では光太夫「三十兩」、磯吉「二十兩」とあるが、「解説」では前者「三十兩」、後者「二兩」とあり、作中は「雑録」と一致する。井上靖はどちらも参照しつつ、文章全体のスタイルは「解説」に倣ったと推察できる。なお昭和四十年版『北槎聞略』「解説」には、この光太夫、磯吉の措置を伝える文面は記載されていない。

(11) 吉村昭は三重県鈴鹿市大黒屋光太夫顕彰会の山口俊彦より、磯吉の陳述を記録した「極珍書」「魯西亞国漂流聞書」の提供を受けた。磯吉、光太夫が帰郷していたことを裏付ける「寛政十年・磯吉帰郷文書」、「享和二年・光太夫帰郷文書」の存在も知らされた。「大黒屋光太夫」(平成十三年十月一日〜十四年十月三十一日「毎日新聞(夕刊)」)は、これらを反映させた小説である(吉村昭「文庫版あとがき」、川西政明「解説」(新潮文庫『大黒屋光太夫』平成十七年六月)参照。現在、「魯西亞国漂流聞書」は「江戸漂流記総集別巻・大黒屋光太夫史料集第二巻」(平成十五年三月、日本評論社)に、「極珍書」寛政十年・磯吉帰郷文書「享和二年・光太夫帰郷文書」は同四巻(平成十五年六月、日本評論社)に収録され、史料発見の経緯等を記した山下恒夫による「解説」も見られる。

\*引用文中、旧字体は新字体に、仮名異体字は標準字体に改めた。濁点欠落  
とおぼしき仮名については原文通りとした。井上靖作品引用は『井上靖全集』  
全二十八巻別巻一（平成七年四月）平成十二年四月、新潮社）に拠った。『北  
槎聞略』の引用文中、傍線部、二重傍線部は原文通りで、前者は人名、後  
者は地名を表す。その他の傍点、傍線は私に付した。

―たかぎ・のぶゆき、別府大学教授―